町医者だより

平成23年04月号

＜発行・お問合せ先＞
おおわだ内科呼吸器科
院長　大和田　明彦
市川市南八幡４－７－１３
ｼｬﾝﾎﾟｰﾙ本八幡２階
ＪＲ本八幡駅南口(シャポー改札口)
１分ミスタードーナツ並び
ヘアサロンAsh向かいビル2階
電話０４７-３７９-６６６１

おおわだ
内　科
呼吸器科

妊娠中の吸入ステロイドの胎児への影響

喘息は成人では女性に多く、妊娠中のぜんそく治療、特に吸入ステロイドの継続に対して抵抗がある方も多いと思います。この町医者だよりでも以前取り上げましたが（平成２２年１月号）、妊娠中に吸入ステロイドを使用しても赤ちゃんの奇形の増加はありません。
今回、吸入ステロイドがお腹の赤ちゃんの副腎機能にどのような影響をおよぼすかの報告(Am J Respir Crit Care Med, 2011)を紹介いたします。

妊娠中のぜんそく治療

妊娠中の喘息治療の大原則は吸入ステロイドを継続することです。なぜならば、治療の中断が出生時の赤ちゃんの体重減少（低体重児）につながる可能性が大きいこと、さらには母親の周産期の合併症が増えることが知られているからです。

吸入ステロイドとはどのような物質か

それでは、吸入ステロイドがお母さんに全く吸収されないかと言えばそれは嘘になります。吸入ステロイドは、もともと吸入量が少量ですので、肺から吸収され血液中に取り込まれるステロイドの量は微量です。しかしながらゼロではありません。ステロイド、すなわち副腎皮質ホルモンは、腎臓の上にくっついている数グラムの小さい副腎という臓器の外側部分の皮質から分泌されるホルモンです（内側は髄質といいます）　。ホルモンはその分泌量がもともと微量で、脳下垂体という部分が血液中のホルモン濃度を管理しています。どのように調節するかというと、例えば、副腎皮質ホルモンの場合は、脳下垂体がコルチコトロピン刺激ホルモン（ＣＲＨ）を分泌しています。分泌されたＣＲＨは副腎皮質に到達して副腎皮質ホルモンの分泌を促進します。ですから副腎皮質ホルモンの血液中の量はＣＲＨの濃度に依存します。

胎児への吸入ステロイドの影響はない

妊娠初期の胎児下垂体機能は未熟なため、胎盤からコルチコトロピン刺激ホルモン（ＣＲＨ）が分泌され、胎児の副腎機能の発達と胎児の副腎皮質ホルモン分泌を促します。胎児の副腎機能を知る指標になるのは母親の血液中のエストリオール量で、胎児の副腎でその元になるステロイドが分泌され、胎児肝臓で代謝され、胎盤でさらに変化して母親の血液中に放出されます。胎盤由来のＣＲＨは薬として投与されたステロイドで増加しますが、胎児由来のエストリオールは外から投与されたステロイドで減少します。

喘息のない妊婦さん、吸入ステロイド未使用の喘息の妊婦さんと比べて、吸入ステロイドをを使用している妊婦さんの血中エストリオール濃度に減少がなく、一番懸念される吸入ステロイドの赤ちゃんの副腎機能への影響がないことが示されました。胎盤機能に関しては胎児の性別で結果が異なりました。胎児が男児の場合のみ吸入ステロイドの影響をうけてＣＲＨが増加していました（この相違が何によるかは不明とのことです）。